

少し進むとF1一五層に着く。すぐ上の砂防ダムと共に左岸を高捲く。右からの支沢をすぎ砂防ダムを越えて少しくと廊下状となり、最奥に二個の砂防ダムがある。左岸に試掘跡かと思われる坑道が残っていて、内部は鉄分が沈着して鐘乳洞のような感じになっている。左岸を登ろうとするが、岩がボロボロで極めて危険。結局ザイルの先にカラビナをつけて上にぼり上げ、樹木からませて、それを頼りに捲く。じきに四郎右エ門沢出合。渡辺・穴戸両君とわかれる。

今までのV字状に深くえぐれた沢筋と変わって、明るい平凡な砂防ダムの連続する沢筋がしばらく続く。何のための道路なのか、建設工事が行われている。工事現場を過ぎると冷たくきれいな水に変わった。平凡な沢筋をなおも登る。一時間程で二俣。右沢に入る。一休みしながらヤマウドをザックいっぱいとり、なおも登る。「平凡な沢だ。ウドだけが収穫だ」と話していたら、がぜん滝が出てきた。まず三層と五層の連続する滝を直登。そして一五層の滝に出る。ここは左岸の高捲きだ。その上流にも更に三層、五層と続きいづれも直登。最後の二〇層二段滝ではシャワークライミングまで楽しむ。一二時四

五分登山道に出て蟹ヶ沢の廻行を終える。

(記)

(タイム)

出合七・二〇―四郎右エ門沢出合九・〇五―二俣一
一・〇〇―沢終了・登山道一二・四五―家形ヒュッテ一
三・〇五

四郎右エ門沢

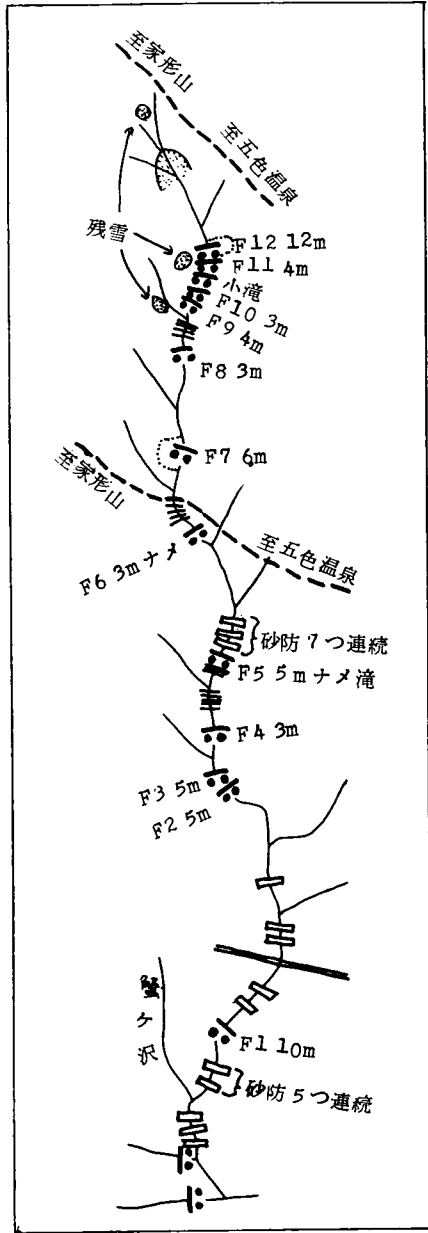
一九七九年六月十七日

◆天気(晴)

菅野君に蟹ヶ沢出合・砂防ダムまで送ってもらう。二俣まで西・浅野パーティと共に廻行。最初の滝一五層とすぐ上の砂防ダムを一緒に左岸から捲く。左岸にはヤマウドが群生していた。少し行くと左岸より滝となって支流が入り込んでいた。砂防ダムを越えるとすぐ左岸より五〇層・二段の滝となって再び支流が入り込んでいた。右岸からの支流を見送ってすぐ砂防ダムが三つ連続して現われた。左岸をゴボー抜きにして高捲く。すぐに二俣。西・浅野パーティに別れて右俣の四郎右エ門沢に入る。

すぐに砂防ダム五つ連続を通過。一〇位の滝と砂防ダム二つを過ぎると林道が見えて来た。そばにプレハブの小屋があり、蟹ヶ沢方面に続いているようであった。砂防ダムと支流を過ぎると前方に鉾山が見えて来た。鉾山の手前が二俣となっており、左沢に入る。鉾山の傍に各五位の滝が二つ、二段滝のようになっている。鉾山を過ぎたのもう砂防ダムもないと思って進むと、小滝二つを越えた所に砂防ダムが七つ連続していた。

一時過ぎに登山道を横切るが、水量はまだかなりあ



四郎右工門沢 (作図:)

るのでこのままに進むことにする。すぐF7六位があつて、この滝の下と左岸に人工の洞穴があつた。右岸を捲き先に進む。右岸に残雪を見てからは滝が次々とかかつてきた。F12一二位は直登しようとしたが岩がもろく、結局左岸を捲く。ここを過ぎるとガレ場である。石が浮いているので慎重かつ足早に通過。

笹がおおいかぶさつてきた。所々にミズバシヨウが咲いている。ヤブこぎ一五分程で登山道に出た。家形山に登り、家形ヒュッテに下つて、西・浅野パーティに落ち

合う。

(記)

〔タイム〕

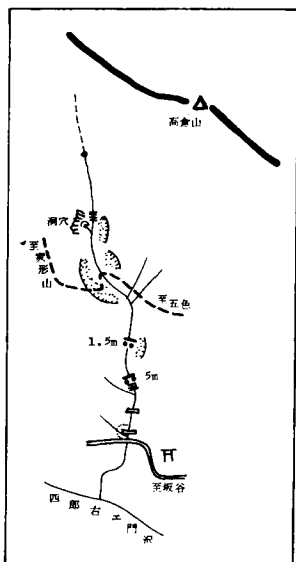
出合七・一五―四郎右エ門沢九・〇五―登山道二一・
一〇―沢終了一三・〇〇―登山道一三・一五―家形山二
四・〇〇

山神沢 (仮称)

一九八〇年十月二十六日

◆天気(小雨のち曇、一時ミゾレ)

一九八〇年最後の沢登りはミゾレにあうあいにくの天
気であったが、一時間にも足りない山行であったため、
あまり寒さを感じることなく終了した。



山神沢 (作図:)



山神沢 (仮称) を遡る

車で板谷鉱山までゆき、沢近くの神社で身仕度を整え
る。沢に入るとすぐ砂防ダム。これを越えた所でワラジ
を付ける。

砂防ダムをもう一つ越えるとすぐに滝。この沢唯一の
滝といえる滝で五メートル程。右岸を登る。

次の一・五メートル滝を越えたと二本のパイプが沢を横切っ
ている。左岸から小沢が二本入ると今度は登山道が横切
る。五色温泉と家形ヒュッテを結ぶ登山道だ。右岸のガ
レ場をのぼっていつている。

少し遡ると、右岸のガケの間から水が流れ出ていた。